

THE 生産現場

今橋製作所（茨城県日立市、今橋松男社長、0294・39・1161）は、半導体製造装置の真空バルブや自動車レースなどに使うアルミ部品加工に加え、難形状部品加工などを手がけている。受注の約9割が1～5個程度の少量加工でありながら、複雑加工、かつ短納期が求められる場合も多く、生産効率の改善が日常的な課題になっている。

今橋製作所

アドバイザー招く

そこで2010年度から茨城県北地域の中小企業の支援機関、日立地区産業支援センター（HITS、日立市）のアドバイザーを招き、生産効率の改善に努めている。目標達成年度は特に定めていないものの、「単品加工が多く、一つひとつの段取り時間を減らせばかなり改善できる」（今橋正守常務）と、10年度比で2割改善の目標を設定。「見た目だが、現状ですでに1割は改善している」（同）と満足そうな表情をみせる。

だが、同社がアドバイザーを招いた理由は、作業員への技術的サポートだけではない。「技術畑の社長が元気づちには、外部の刺激も受けながら少しずつ指導

生産効率改善に外部の力



責任者の指導力向上も

力を向上させていきたい」（同）と生産現場の責任者の育成も兼ねている。

今橋正明製造部グループリーダーが製造現場の責任者の地位に就いたのは、およそ5年前。外部アドバイ

ザーが入る前から作業者を教育してきたが、意思疎通を円滑に図ることができないこともあった。今橋常務

は「責任者が作業員に教えるのが当たり前だという感じになれば生産性は自然に改善できる」と

し、「目上とか目下とか関係ない。教える側が言いたいことをはっきり言うことが必要だ」と

教える側の意識改革を進めてい……………生産途中で作業員に声をかける今橋製造部グループリーダー

る。始めは苦勞していた今橋グループリーダーも、「最初の頃に比べ、あまり遠慮せずに言いたいことを言えるようになった」と胸を張る。

作業「見える化」

現在では、アドバイザーの導入効果もあり、加工前に工程の概要を書き出し、作業の「見える化」を進めている。作業中も責任者が作業員の持ち回り現場に行き、ちょっとしたことで指摘するようにしている。一方、熟練作業員には超硬工具など工具の材質を変えてデータ集積をお願いするなど、作業指示の内容や水準はさまざまだ。「人に教

えるためには、その人の技術水準に合っているかを一番に考えるようになった」（今橋製造部グループリーダー）と指導力を着実に伸ばす。

同社は今後も製造現場責任者を育成し、生産効率を引き上げる基礎固めにしていく方針だ。

（木曜日に掲載）

【工場メモ】

1964年（昭39）に日立市会瀬町で創業。06年に同じ日立市内の伊師工業団地内に本社と工場を移転した。半導体製造装置向けのアルミ加工が主力だが近年ではステンレス加工のほか、07年に導入した3次元CAD/CAMや同時5軸制御マシニングセンターにより、複雑な切削加工にも取り組んでいる。従業員は15人。